

『猟師グラフス』と『バケツ騎手』

吉 野 英 俊

(1)

中間領域にあるという状態は、カフカの存在のあり方、及び彼の文学のあり方の基本形をなしている。世紀末のプラハに生まれたこの詩人の伝記的事実がすでに様々な生活領域における彼の中間存在を示していることは、K. Wagenbach や G. Anders の指摘するところである。例えば Anders は（すでに様々な論文で何度も引用された箇所であるが）カフカを一個の「異邦人」であるとして、次のように述べている。『かれは、ユダヤ人としてキリスト教的世界に完全にはぞくしていなかった。宗教的にインディフェレント（無関心主義的）なユダヤ人として——というのは、かれは、根源的にインディフェレントだった——ユダヤ人にも完全にはぞくしていなかった。ドイツ語使用者としてチェコ人にも完全にはぞくしていなかったし、ドイツ語を話すユダヤ人としてボヘミア・ドイツ人にも完全にはぞくしていなかった。ボヘミア人としてオーストリアにも全的にぞくしていなかった。労働者災害保険局の役人として市民階級にも完全にはぞくしていなかったし、市民の息子として労働者階級にも完全にはぞくしていなかった。また、官庁にもぞくしていなかった。というのは、自分を作家だと感じていたから。しかし、また作家でもなかった。というのは、かれは、かれの力を家庭のために犠牲にしていたから。しかし、「ぼくは、

ぼくの家庭のなかで他人よりもなおいっそう他人のように暮らしている⁽¹⁾』と。カフカは温かく生き生きとした共同体と禁欲的な孤独との間で、信仰と不信、希望と絶望との間で、彼岸と此岸、生と死の間で絶えず揺れ動く。

彼の作品中の多くの人物も作者と同様の中間領域に定住している。この意味で、つまりカフカは自分の状況を観察し、それを忠実に描写したという意味で、たとえ彼の作品がどれほど幻想的に見えようとも、彼はリアリズムの信奉者なのである。彼が書いたものが奇異に、夢のように、あるいは非現実的に見えたとすれば、それは彼の生活自体がすでにそうだったのである。カフカは『日記』にこうしている。「生きている間は人生に決着をつけることをしない人間は、片手を使って自分の運命にふりかかる絶望を少しばかり防いでいるのであり、それはほとんど成功しないが、しかしもう一方の手で、彼が瓦礫の下に見ているものを集めることはできるのだ。なぜなら、彼は他の人びとは別なものを、そして他の人々よりはよく見ているからだ。それにしてもやはり、彼は生きながらにして死んでいるのであり、生まれたときからの生き残りなのだ。……」(T545)

ところで、J. B. Honegger は生と死の境界地帯に定住したり、あるいは少なくともそれが意味している危険と対決している、その最もはっきりした例として、『墓守り』と『獵師グラフス』を挙げ、両作品をひとつの章でまとめて論じている。⁽²⁾『墓守り』を概観するために、Honegger の論を緩用すれば、年老いた墓守りはフリードリヒ霊園（死の領域）とそれを取りまく城の庭（生の領域）との境界に配置されており、昼は誰も城の庭から霊園へ入らぬよう、逆に夜は生者のもとへ戻ろうとする死者たちを庭へ入れぬように監視する任務を与えられている。そして夜毎の死者たちとの格闘によって墓守りはひどく疲労している。一見するとこの墓守りは、生と死の中間領域で持ちこたえるよう運命づけられているカフカその人の代理人のように思われる。だが、墓守りの任務は公爵、つまり生者の委託による任務であり、墓守りは生からも死からも締めだされていると感じていないことによって、このような印象は誤っており、そうではなくて公爵こそがカフカの存在のあり方を具現していると彼は分析してい

る。公爵は一方では統治にたずさわり、彼の権力の基礎を固めようとしているが、他方では、この墓守りに加えて、もう一人の番人を霊園の中に配置しようと考えていることから分るように、過去や死の領域にも深くかかわり、この領域の危険性を十分に察知している。霊園の監視の強化が本当に必要であることを自分自身と周囲の人々に納得させるために、公爵は墓守りを招喚したのであるが、彼から話を聞くにつれて当初の意に反して次第にこの領域の魔力の中へ引き込まれてしまう。以上のように公爵は、やっと今、生の領域から遠ざかり、生と死の中間領域の虜になりかけている人物なのである。そして『獵師グラフス』の主人公は「最終的な故郷喪失者、関係喪失者」なのである。

この拙論も当初は『墓守り』と『獵師グラフス』を比較検討する予定であった。だが『グラフス』を読んでいるうちに、むしろ『バケツ騎手』との内容上、表現上の共通点に気づき始めた。なるほど『バケツ騎手』には先の両作品におけるほど直接的な表現では「生と死」はあらわれていない。石炭を得るために空っぽの石炭バケツに乗り、空を飛んで石炭屋へ助けを求めにいくという構想は、子供の童話さながら空想じみており、ほほえましくさえ思われ、到底『墓守り』や『グラフス』ほど深刻な話ではないという印象があるかもしれない。だが、ここにも *»ich darf doch nicht erfrieren.«* という表現があり、主人公が今手に入れねばならない石炭は、ちょうど断食芸人にとっての食物と同じようにこの状況下では彼の生死に決定的な意味をもつものであり、明らかに生と死のモチーフはここにも存在しているのである。

拙論では、まず『獵師グラフス』を検討し、そのあとで共通点を探しながら『バケツ騎手』を論じていこうと思う。この二作品はともに原文で数頁の小品であり、成立時期も1916年から1917年にかけてのことであり、両者の比較は突飛なものではないと思われる。⁽³⁾

(2)

»Zwei Knaben saßen auf der Quaimauer und spielten Würfel. Ein Mann las eine Zeitung auf den Stufen eines Denkmals im Schatten

des säbelschwingenden Helden. Ein Mädchen am Brunnen füllte Wasser in ihre Bütte. Ein Obstverkäufer lag neben seiner Ware und blickte auf den See hinaus. In der Tiefe einer Kneipe sah man durch die leeren Tür- und Fensterlöcher zwei Männer beim Wein. Der Wirt saß vorn an einem Tisch und schlummerte.《

冒頭では、リーヴァ市の港の、のどかな日常的光景が描写される。「棧橋」「記念碑」「噴泉」といった実在のリーヴァ市を彷彿させる建造物⁽⁴⁾に、「少年」「男」「少女」「果物売り」「酒場の客」「亭主」といった、きわめて類型豊かな諸人物が相互に関連なしに配置されている。これらはすべて「自然のままの人間の基本的なタイプを代表しているように」⁽⁵⁾見える。そして sitzen, spielen, lesen, füllen, liegen, hinausblicken, sehen, schlummern といった一連の状態の動詞が、この場面をことのほか静的なものにしている。読者はまるでやはりぼての舞台装置を観客として目で追っていくかのようだ。

そこに、ふと運動が生じる。つまり一艘の小舟が音もなく入ってくるのだ。

》Eine Barke schwebte leise, als werde sie über dem Wasser getragen, in den kleinen Hafen. Ein Mann in blauem Kittel stieg ans Land und zog die Seile durch die Ringe. Zwei andere Männer in dunklen Röcken mit Silberknöpfen trugen hinter dem Bootsmann eine Bahre, auf der unter einem großen blumengemusterten, gefransten Seidentuch offenbar ein Mensch lag.《

だが、この小舟こそ、これは後になってようやく判明するのだが、死んだ獵師グラスをのせて、天上と地上の間を永遠に漂う、別な世界からの訪問者なのだ。「この世の日常的な空間への、他者の神秘的な侵入」は実に見事になされる。それは「時を表す従属文によって始められるのではなく、切れ目を強調する副詞の時間規定（例えば、その時、突然など）によって始められるのでさえ

(6)
ない」この侵入は、*als werde sie über dem Wasser getragen* という現実とも非現実ともつかぬ、ギリギリの比喩文によって完璧におこなわれる。舟が到着してしまうと運動は一度に活発になる。青い上っ張りを着た男が上陸し、ロープを輪に通す。銀ボタンのついた黒っぽい上衣を着たふたりの男が、担架を運び出す。その上に横たわる一人の人間にかけられている「絹布」は何とも奇妙だ。*ein großes blumengemustertes, gefranstes Seidentuch* とは、明らかに女物であり、十分に人目をひきつけるはずのものである。注意深い者ならば別な世界からの訪問者をかぎつけられたかもしれない。

だが、上陸したこの胡散臭い一行に関心を払う者は誰もいない。彼らと日常世界との関係喪失は *niemand* という語が三度反復されることによってとくにきわだたせられている。即ち、

»Auf dem Quai kümmerte sich niemand um die Ankömmlinge, selbst als sie die Bahre niederstellten, um auf den Bootsführer zu warten, der noch an den Seilen arbeitete, trat niemand heran, niemand richtete eine Frage an sie, niemand sah sie genauer an.«

ふたりの担ぎ手が、低い細身の柱でかこまれた門のなかに姿を消すのを、ひとりの男の子が窓をあけ、ちょうど目撃するが、またいそいで窓をしめてしまう。ひょっとするとこの子も遅ればせながら、後に出てくる五十人の二列縦隊に加わろうとしたのかもしれない。担架を運ぶ一行をあたかも隔離するかのよう、門もしめられる。すると、それまで鐘楼のまわりをとびまわっていた鳩の群れが、家のまえにおりてきて、餌がこの家のなかにたくわえてあるかのように、門のまえに集まってくる。この比喩文 *als werde im Hause ihre Nahrung aufbewahrt* も、おそらく獵師の小舟の日常世界への侵入と同じ意味をもっているであろう。つまり、この鳩の群れもこの世のものではなく、それらも運びこまれた獵師を追って、日常世界の中へ舞いこんだのである。というのも、「鳩」は死んだ獵師の先触れをつとめる動物であり、また *»Eine*

flog bis zum ersten Stock auf und pickte an die Fensterscheibe《と、きわめて鳩らしからぬ行動をするのである。この行動は、『村医者』の豚小屋から出現した、この世ならぬ二頭の馬が患者の部屋の窓からのぞきこむのとよく似ている。しかも、この鳩にも、先の「絹布」を修飾する三つの形容詞と同様に、やはり三つの奇妙な形容詞が付されている。即ち、》Es waren hellfarbige wohlgepflegte, lebhafte Tiere《と。鳩たちは、生と死の間を漂う小船の船頭の妻(彼女は船頭をひきとめ、胸に子供を抱いているところからそう思われる)によって養われており、市長に先触れした一匹は「にわとりぐらいの大きさ」だったのである。

南国の港ののどかな情景は、シルクハットに喪章をまきつけた一人の男の登場によって、急転する。》Ein Mann im Zylinderhut mit Trauerband kam eines der schmalen, stark abfallenden Gäßchen, die zum Hafen führten, herab. Er blickte aufmerksam umher, alles bekümmerte ihn, der Anblick von Unrat in einem Winkel ließ ihn das Gesicht verzerren. Auf den Stufen des Denkmals lagen Obstschalen, er schob sie im Vorbeigehen mit seinem Stock hinunter.《

男は、あたりの様子を注意深くうかがう。どんなことでも気になるらしかった。片隅の汚物に顔をしかめ、階段上の果物の皮をステッキの先で払いおとす。彼こそ、このことも後で判明する仕組になっているのだが、当地リーヴァの市長なのである。町の汚れに注意を払い、清潔に保とうとする行為は、市長としての職務のなせる業であろう。表面的にはそう読めそうである。だが、この市長に面談を求めている男、獵師の方は彼とは対照的に汚れているのだ。⁽⁷⁾》Ich liege auf einer Holzpritsche, habe——es ist kein Vergnügen, mich zu betrachten——ein schmutziges Totenhemd an, Haar und Bart, grau und schwarz, geht unentwirrbar durcheinander,……《従って、市長の潔癖は日常世界と獵師の非日常的な世界とを鮮かにきわだたせる機能を帯びている。カフカは『審判』でも同様の手法を用いている。即ち、上流階級に位置するヨーゼ

フ・Kと不潔な屋根裏部屋に遍在する裁判所世界の対比を。

市長は、例の家のまえまで来ると、門の扉をノックする。すると、すぐに門があいて、五十人ばかりの少年たちが、長い廊下に二列縦隊をつくって、お辞儀をする。これももう少し後になって分ることなのだが、この場面は》,Morgen kommt der tote Jäger Gracchus, empfangen ihn im Namen der Stadt.《⁽⁸⁾ という鳩による伝言を市長が忠実に実行した結果であろう。出迎えたのは、奇妙なことにみな子供ばかりで、市長の外には一人の大人もいない。舟の入港の際と同様に、ここでも大人たちの無関心が示されている。それとは逆に、子供たちは運びこまれた男にひどく興味を抱いているように見える。彼らは男を見ようと、船頭と市長の後につづき、追い払われるまで部屋の外に勢ぞろいしていたのである。獵師に対する大人たちの無関心と、子供たちの興味という対比は、『グラフス』断片によって説明される。「この小篇のすべての前提がふり落とされ、完全に詩を断念し、対話として、つまりドラマの一場面として」⁽⁹⁾ 物語られている『断片』では、獵師の対話相手は世間の人々が獵師に関して無知である理由をこう説明している。「……このみじかい人生では、自分と自分の家族に世間なみの暮らしをさせることだけでもう手いっぱいなんです。獵師グラフスは、たいへん興味ある人物であるけれども……だれだって、彼のことを考えたり、いろいろ調べまわったり、ましてや心配してやったりする暇なんかありません。……(249 f.)」つまり、大人たちは誰もが生活に追われており、いわば生の真只中にいる。だからこそ彼らは死（獵師）という生を混乱させ、脅すものを閉め出そうとするのである。それに対して子供たちは生活に追われる必要がなく、生と死という両領域を自由に出入りできるのである。この小篇の異稿のひとつである『屋根裏部屋にて』でも、「百年以上にわたってきたがらくた道具が積みあげられ、大人ではもう手探りもできなくなっていた」屋根裏部屋で「埃まみれの獵師ハンス」を発見するのはやはり子供たちなのである。類似の例は『変身』にも見出されうる。この主人公も変身することによって、いわば「死んではいるが、ある程度生きてもいる」獵師と同様の状況に陥るのであるが、彼の世話をするのは、ヴァイオリンを弾き、きれいな服

を着て、朝遅くまで眠っている、まだ十七歳のほんの子供、つまり家族の中で唯一職業生活から免れている妹なのである。

市長が獵師の額に手をあて、ひざまずいてお祈りを始めると、船頭は担ぎ手に部屋を出るよう合図する。彼らは外の子供たちを追い払う。すると今度は市長自身が船頭にも出ていくようそれとなく促す。こうして「静かなうえにもさらに静まりかえったとき」「死者と生者の対話が始⁽¹⁰⁾」まる。ここで市長が昨晚の鳩の先触れを口にする時、これまでの事象が一気に連がりあい、緊張が一度に高められる。つまり、担架で運ばれた男は死んだ獵師であること、帽子に喪章を着けていた紳士は市長であり、喪章は獵師のためであったこと、不思議な鳩の群はこの世のものでないこと、五十人もの少年たちは獵師を出迎えるためのものであったことなどである。とくに担架の男が死者であることは、冒頭からこの男のことがすでに何度か言及されていながら、対話が始まる直前まで巧みに隠されつづけている。即ち ›……Er lag bewegungslos, scheinbar atemlos mit geschlossenen Augen da, trotzdem deutete nur die Umgebung an, daß es vielleicht ein Toter war.《 と。

獵師は先触れの鳩を飛ばしていたにもかかわらず、最初は市長のことが分らず ›Wer bist du?《 と尋ねる。そして、そうする理由を次のように説明する。›Ich wußte es ja, Herr Bürgermeister, aber im ersten Augenblick habe ich immer alles vergessen, alles geht mir in der Runde und es ist besser, ich frage, auch wenn ich alles weiß……《 獵師は何でも知っているくせに最初のうちは何も彼も忘れてしまっている。この忘却はひとつには住みなれた水上から、なじみのない陸上への移行時のショックによって説明されうる。あるいはまた、眠りから目覚めへの移行時の不適応としても説明されえよう。先触れの鳩が市長のもとに飛んできたのは「夜中」のことである。獵師の舟が水上を漂うのは「夜」のことであり、朝には陸地の近くにいることは、獵師によって説明される。›Julia, die Frau des Bootsführers, klopft und bringt mir zu meiner Bahre das Morgengetränk des Landes, dessen Küste wir gerade

befahren.《あるいは次のようにも》……Durch eine Luke der Seitenwand kommt die warme Luft der südlichen *Nacht* und ich höre das Wasser an die alte Barke schlagen.《おそらく獵師は一日の中でも水上と陸の生活を繰り返しているのだろう。だからこそ彼は日常世界とは無縁な存在でありながら世間のことを何でもよく知っているのだ。水と陸との間の反復はまた、天上と地上との間の反復でもある。彼は天国の門に限りなく近づくが、いつもあと一步のところで再び地上の水の上にいる小舟で眼を覚ますのだ。獵師の忘却は水と陸、天と地という二つの両極間を彼の小舟が反転する時に生じるのである。

獵師は「黒森地方でアルプスかもしかを追いかけている最中に崖から落ちて」死んだと語る。「……獲物を追いかけていて転落し、ある谷間で出血多量で」死んだのである。この小篇では獵師の死についてはこれ以上何も語られない。しかし、『断片』では「アルプスかもしかのやつがわしを誘惑さえしなかったならば——いつまでもすばらしい獵師の生活を送れたところだが、アルプスかもしかのやつが誘惑しやがった」とある。『アメリカ』のカールや『村医者』の医者同様に、獵師の悲運の始めにも誘惑がある。だが、問題はここにあるのではない。つまり獵師は自分が死んだことを全然悔やんでいないばかりか、逆に喜んでさえいるのだ。》……und diese Barke sollte mich ins Jenseits tragen. Ich erinnere mich noch, wie fröhlich ich mich hier auf der Pritsche ausstreckte zum erstenmal. Niemals haben die Berge solchen Gesang von mir gehört wie diese vier damals noch dämmerigen Wände./ Ich hatte gern gelebt und war gern gestorben, glücklich warf ich, ehe ich den Bord betrat, das Lumpenpack der Büchse, der Tasche, des Jagdgewehrs vor mir hinunter, das ich immer stolz getragen hatte, und in das Totenhemd schlüpfte ich wie ein Mädchen ins Hochzeitskleid. Hier lag ich und wartete.《

彼はこれまでの獵師の生活にきっぱりと別れを告げ、小舟が彼を彼岸へ運んでくれるという喜びに胸を一杯にして待っている。真の不運はその時に生じる。獵師の話に聞き入る市長も思わず《Ein schlimmes Schicksal》と言葉を

もらし、》mit abwehrend erhobener Hand《と防衛的な仕事をするほどだ。そして》Und, Sie tragen gar keine Schuld daran?《と尋ねる。

獵師は祝福された自分の職業、かつての自分の名声を根拠に自分の責任を回避し、何の根拠も示さず、たった一言「船頭」のせいだと言う。だが、これはおそらく、自分の小舟が永遠に漂流することになった原因を先にこう説明しているからであろう。即ち》……Mein Todeskahn verfehlte die Fahrt, eine falsche Drehung des Steuers, ein Augenblick der Unaufmerksamkeit des Führers, eine Ablenkung durch meine wunderschöne Heimat, ich weiß nicht, was es war, nur das weiß ich, daß ich auf der Erde blieb und daß mein Kahn seither die irdischen Gewässer befährt.……《しかし船頭に起因する理由をいくつ挙げたところで、それで獵師自身の責任がすっかり払拭されたわけではない。獵師は相手から否定的な返事をもらえることを期待しながら次のように尋ねるが、そこにはその期待を上回る不安が顔をのぞかせているように思われる。》……ich war Jäger, ist das etwa eine Schuld? Aufgestellt war ich als Jäger im Schwarzwald, wo es damals noch Wölfe gab. Ich lauerte auf, schoß, traf, zog das Fell ab, ist das eine Schuld? Meine Arbeit wurde gesegnet. „Der große Jäger vom Schwarzwald“ hieß ich. Ist das eine Schuld?《

この問いに対して市長は一応獵師の期待通りの返事をするが、それは》Ich bin nicht berufen, das zu entscheiden.《と条件を付した上でのことなのである。このように獵師の悲運の原因は獵師個人にあるのか、あるいはもはや人間の力の及ばない何かにあるのか、ここでは未解決のままにされている。

獵師にとって「天国の門」は救いである。彼が常にその上を動いている「はてしもないほど広くて大きい階段」は、確実にその門へと通じている。だが、どういうわけかその寸前で再び地上の水の上にもどってしまうのは、すでに述べた通りである。だが、地上もまた獵師にとってはひとつの救いなのであろう。だからこそ彼はリーヴァの市長に大仰な先触れを与え、彼に面談を申込

んだのである。この世が救いであることは ›Salvatore‹ (救済者) という市長の名が (たとえ市長がどんなに無力であるとしても) 暗示している。また対話の最後近くで獵師がこう告白していることから知られよう。›Das weiß ich und schreie also nicht, um Hilfe herbeizurufen, selbst wenn ich in Augenblicken——unbeherrscht wie ich bin, zum Beispiel gerade jetzt——sehr stark daran denke.‹

獵師にとって耐えがたいのは、従って、彼岸にも此岸にも定住できずにその中間領域にいつまでも漂っていることなのである。彼は自分の相手が市長であることを確認し、ごく簡単に自己紹介を済ますと、ただちに ›Glauben Sie aber, Herr Bürgermeister, daß ich in Riva bleiben soll?‹ と話を切り出す。それは何とおだやかな問いかけであることだろう。決して滞在許可を求めるとか、頼むというものではなく、まるでほんのついでに訊いてみただけといったふうだ。一方、それに対する市長の答えとそれに続く問いはその職掌柄いかにも気真面目なものである。›Das kann ich noch nicht sagen. Sind Sie tod?‹ このような市長の姿勢は「死者には、滞在を許可するわけにはいかないと思えるからである。市長は、絶対多数の生者の側から話して^(II)」いるからなのである。市長にとって幸いなことには、獵師は物語った話のものすごさにもかかわらず、生者に対して寛大であり、色よい返答など最初から期待していないように見えることである。彼はこう言う。›Niemand wird lesen, was ich hier schreibe, niemand wird kommen, mir zu helfen; wäre als Aufgabe gesetzt mir zu helfen, so blieben alle Türen aller Häuser geschlossen, alle Fenster geschlossen, alle liegen in den Betten, die Decken über den Kopf geschlagen, eine nächtliche Herberge die ganze Erde. Das hat guten Sinn, denn niemand weiß von mir, und wüßte er von mir, so wüßte er meinen Aufenthalt nicht, und wüßte er meinen Aufenthalt, so wüßte er mich dort nicht festzuhalten, so wüßte er nicht, wie mir zu helfen. Der Gedanke, mir helfen zu wollen, ist eine Krankheit und muß im Bett geheilt werden.‹

生の只中にある人にとっては、生と死の間領域に住む獵師の存在は、公爵にとっての幽霊たちと同様に、混乱と無秩序という危険を意味しているのである。冒頭における港の人々の獵師に対する無関心も理由のないことではない。だが獵師の方は自分の危険性も、それに対する人々の防御本能も十分に承知しているように見える。彼は「わたしを助けてやろうなどと考えること自体がひとつの病気であって、それこそベッドに寝て養生しなくてはなりません」と言っている。彼は自分を助けようとしないうる生者を少しも責めたり、恨んだりしていない。そもそも生者には彼を助けることなど二重三重に不可能なのだ。

助けを求めるべき獵師がそうすることをせず、また助けを求められたはずの市長はこの件に関して全く無力であるので、この対話は何とも絶望的な色彩を帯びてしまう。つまり *》Glauben Sie aber, Herr Bürgermeister, daß ich in Riva bleiben soll?《* という獵師の問いで始められた対話は、結局 *》Und nun gedenken Sie bei uns in Riva zu bleiben?《* という市長の「形式的な、おそろくはまた不安な」問いにゆきつき、*》Ich gedenke nicht.《* という相手の心中を何も彼も読みとっているかのような獵師の返答で終了する。その間、市長はなるほどこの未知の世界からの客人を手厚く迎えるが、彼個人を極力、自分の官職の背後に押し殺し、そこから一步も踏みだそうとはしないのである。

獵師は最後にこれから先の自分の運命を語るが、そこにはもはや漂泊の原因をつきとめようとする意志は微塵もなく、ただままたぬ自分の運命に対する諦念が感じられるばかりである。*》Ich bin hier, mehr weiß ich nicht, mehr kann ich nicht tun. Mein Kahn ist ohne Steuer, er fährt mit dem Wind, der in den untersten Regionen des Todes bläst.《*

(3)

では次に『バケツ騎手』を検討してみよう。まずその書き出しであるが、「石炭」から始まって、「石炭バケツ」「シャベル」「ストーブ」を経て、「部屋」全体の印象、次いで窓の外へ、最後に「空」へと語り手は身近な対象から次第に遠くの対象へ言及していく。だがこの描写も『グラフス』の冒頭部と同様

に、何から何まで細密に描き尽くそうとする作者の意図はうかがえない。むしろ描写の対象とそれに費す言葉は最小限にとどめておき、それでいてその場面の雰囲気や状況を最大限に描出しようとする意図が感じられる。『バケツ騎手』は次のように始められる。》Verbraucht alle Kohle; leer der Kübel; sinnlos die Schaufel; Kälte atmend der Ofen; das Zimmer vollgeblasen von Frost; vor dem Fenster Bäume starr im Reif; der Himmel, ein silbernes Schild gegen den, der von ihm Hilfe will.……《 形容詞を文頭に置く倒置法によって、その意味は強調され、しかも定動詞はひとつ残らず省かれている。『グラス』では状態の動詞の連続使用によって「静的な」場面を作り出していたが、ここではそれを通り越して、いかにも寒さに凍てついた「凝固の」印象を生じさせており、次に続く最初の完全な文 》Ich muß Kohle haben.《 はますます強調されている。これが、「私」の出発の状況である。従って、物語の最初からすでに中間領域にある獵師と「私」の状況は明らかに異なっている。「私」の状況は、これからようやく未知の領域へのりだそうとしている点で、むしろ『墓守り』の公爵の状況と同一である。

そのようなわけで、『グラス』では小舟の入港という出来事によって、日常世界への未知なる他者の侵入が生じるのであるが、『バケツ騎手』では逆に「私」は日常世界から未知の世界へ脱出してゆこうとする。侵入にせよ脱出にせよ、ここで二つの別な世界が交差するわけだが、一方では als ob の比喩文によって交差のショックはほとんど感じられぬほどに和らげられ、他方でも類似の技法によって和らげられている。即ち、》……der Himmel, ein silberner Schild gegen den, der von ihm Hilfe will.《 と 》unten aber steigt mein Kübel auf, prächtig, prächtig; Kamele, niedrig am Boden hingelagert, steigen, sich schüttelnd unter dem Stock des Führers, nicht schöner auf.《 という文によって。ここでは、空は銀の楯であるかのように思われるのでさもなく、銀の楯そのものになっている。飛翔する石炭バケツは駱駝の比喩文によって（それは比喩文とさえ言えぬかもしれぬ）極めて自然に 》Reittier《 に変身し、こうして未知の領域へ向かうための道具がそうと気付かぬ間にととのう。

「私」はこごえ死ぬわけにはいけないので、獵師が市長に面談を求めたのと同様に、石炭屋に救いを求めねばならぬ。即ち ›ich darf doch nicht erfrieren; hinter mir der erbarmungslose Ofen, vor mir der Himmel ebenso, infolgedessen muß ich scharf zwischendurch reiten und in der Mitte beim Kohlenhändler Hilfe suchen.《「私」の背後にある非常なストーブ、「私」の前方には同じく非常な空、そしてその中間に石炭屋がある。この地勢図がまず獵師の場合とよく似ている。獵師は天国の門と死の国のいちばん地底との間を漂泊しつづけている。彼が救いを求めるリーヴァ市は、その中間にあるのであろう。また小舟と石炭バケツの運動の仕方もよく似ている。バケツは「階段を下り」「下まで着くと上昇し」「しばしば二階の高さまでもちあげられ」るのだ。

どちらの作品でも救いを求める者と求められる者の対話がその主要部分をなしている。⁽¹²⁾「私」は自分の目的を達成するために願いを質量共に最小限にする。›ein weing Kohle‹, ›um eine Schaufel voll bitte ich.‹, ›eine Schaufel von der schlechtesten‹ という具合に。支払い方法もまたくりかえし伝えられる。›Sobald ich kann, bezahle ich's;‹, ›……eine Kundschaft, treu ergeben, nur augenblicklich mittellos‹, ›ich bezahle sie natürlich voll, aber nicht gleich, nicht gleich.《 と。獵師には、このような目的達成のための執拗な努力が見られないかもしれぬ。だが、彼は「大昔に」⁽¹³⁾死んで以来、ずっと漂泊生活が続けているので、事情がよく分っているのである。それでも大声で助けを求めたい気持は、「私」同様にまだ残っている。即ち、二度目の引用になるが›Das weiß ich und schreie also nicht, um Hilfe herbeizurufen, selbst wenn ich in Augenblicken——unbeherrscht wie ich bin, zum Beispiel gerade jetzt——sehr stark daran denke.《 救済の可能性を眼前にしている彼らの思いは根本においては何ら変わるところがないのだ。獵師は今リーヴァ市におり、「私」は石炭屋の前にいる。だが、こんなに目標近くにおりながら二つの世界には橋は架けられることはない。

彼らの対話相手、つまり市長と石炭屋のおかみの姿勢にも共通点があるように思われる。市長は、獵師のリーヴァ市滞在という願いを知っていながら、自

分の職務の枠から出ようとしな。石炭屋のおかみも、空中に浮かぶバケツを見上げ、「私」の救いを求める声を聞く。市長は相手が死者であることを何度か確認する。即ち ›Sind Sie tot?‹ あるいは ›Und Sie haben keinen Teil am Jenseits?‹ と。おかみは ›Ich bezahle sie natürlich voll, aber nicht gleich, nicht gleich.‹ という「私」の嘆願の声を聞く。市長の確認は、死者には滞在を許可するわけにはいかないという論理に基づくものであった。自分自身をも含めたリーヴァ市民に不安と混乱をもたらすやも知れぬ死者にはどうしても滞在許可は出せないというわけだ。おかみにしても同様に金をもたない者には石炭は売れないのであろう。「私」の声を聞き、階段を上がっていこうとする石炭屋の主人を押しとどめる、おかみの論拠は ›Erinnere dich an deinen schweren Husten heute nacht. Aber für ein Geschäft und sei es auch nur ein eingebildetes, vergißt du Frau und Kind und opferst deine Lungen. Ich gehe.‹ というものである。ここでは「市民」の代わりに「妻と子」が（石炭屋の「肺」までもが）方便として利用されている。市長にとっての市民と、家長にとっての妻と子はけだし同じものであろう。

両作品の結末はとりわけよく似ている。単に形象の類似性だけでなく、語の選択も同一なのである。『グラフス』の結末では ›Mein Kahn ist ohne Steuer, er fährt mit dem Wind, der in den untersten *Regionen* des Todes bläst.‹ となっていた。一方『バケツ騎手』はこうである。›……Und damit steige ich in die *Regionen* der Eisgebirge und verliere mich auf Nimmerwiedersehen.‹ 石炭バケツは「氷の山々がそびえるあたりへのぼって」いき、一方獵師の小舟は「死の国のいちばん地底を吹いている風のまにまに流されて」いく。一方は酷寒の地へ上昇し、他方は南国の地底へ下降するという相異はあるが、舵もなく風とともに流されていく小舟と、把手がついているだけで、おかみのエプロン⁽¹⁵⁾によってあっさりと吹きとばされてしまう石炭バケツという形象には共通性がある。しかも小舟もバケツもこれを最後にもう二度と戻ってくることはないのである。

生と死の中間領域にあり、本当の生も本当の死も知らぬ諸人物の、生の只中
にいる人々に対する心情はそれぞれ異なっている。『墓守り』の公爵は、周囲
の人々の制止にもかかわらず、自から生と死の境界領域へのめりこんでいく。

『バケツ騎手』の「私」は、明らかに救いを拒んだ者を憎悪しつつ姿を消す。⁽¹⁶⁾

『猟師グラフス』の猟師は、たとえ市長がどれほど無力であるとしても、彼を
恨まず、自分の運命に諦念を抱いている。『グラフス』断片の猟師は、万人が
知っているはずの自分のことに無知な対話相手に怒りを隠さない。このような
多様性こそ共同生活と孤独の間で常に動揺しているカフカの複雑微妙な心情の
変化を如実に反映するものではないだろうか

(注)

- (1) Anders, Günther: Kafka pro und contra. München (C. H. Beck) 1972, S. 18.
- (2) Honegger, J. B.: Das Phänomen der Angst bei Franz Kafka. Berlin (Erich Schmidt) 1975, S. 97-109.
- (3) Pasley, Malcolm/Wagenbach, Klaus: Datierung sämtlicher Texte Franz Kafkas, in: Kafka-Symposium, München (DTV) 1969, S. 64. 同書によれば, Der Jäger Gracchus Januar/Mai 1917, Der Kübelreiter Januar/Februar 1917, ちなみに Der Gruftwächter Winter 1916/17 となっている。
- (4) Binder, Hartmut: Kafka Kommentar zu sämtlichen Erzählungen. München (Winkler) 1975, S. 197 f. 冒頭で言及される「ein Denkmal des säbelschwingenden Helden」は, Binder の実証的な研究によれば, 「1916 年までリーヴァ市の港の広場に立っていた立像で, それは橋や船乗りの守護神である聖ヨハネス・ネボムクを表わしており」「ネボムクの上げられた右手の中の十字架像は, ある一定の視角からでは, 力をこめて振りあげられたサーベルとして誤解されうる」とのことであるが, 『失踪者』冒頭における, 自由の女神像も実際の姿とは異なり, 剣を振りあげている。従って, カフカは何らかの意味をこめて, 意識的に立像の形姿を変えたのであろう。猟師は結局リーヴァ市に迎え入れられることはなく, カール・ロスマンをアメリカで待ちうける運命も苦しい一連の体験であった。どちらの剣も, それぞれの場所で主人公を待ちうける厳しい運命を予告し, 警告しているように思われる。
- (5) Kraft, Werner: Franz Kafka. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1972, S. 182.
- (6) Scholz, Ingeborg: Franz Kafka Kleine Prosa. Hollfeld (C. Bange) 1978, S. 41.

- (7) Kafka, Franz: Tagebücher 1910-1923, S. 378.
『猟師グラフス』の初期草稿と見られる、この記述では、猟師ばかりでなく、彼の乗る船も同じように汚れているものとして描かれている。›Ein schwerer Kahn, verhältnismäßig niedrig und sehr ausgebaucht, verunreinigt, wie mit Schmutzwasser ganz und gar übergossen, noch troff es scheinbar die gebliche Außenwand hinab,……‹
- (8) Kafka, Franz: Beschreibung eines Kampfes, S. 248 ff.
- (9) Kraft, Werner: a. a. O., S. 188.
- (10) a. a. O., S. 184.
- (11) a. a. O., S. 184.
- (12) 正確に言えば、『バケツ騎手』では善意の石炭屋の主人と、悪意のそのおかみと「私」との三人の会話であり、市長と猟師との二人きりの対話とは異なるかもしれない。だが市長は、石炭屋の主人とおかみの性質を兼ね備えている人物のように見える。というのも、助けを求める者を拒む彼の論拠は、あとで述べるように、おかみの論拠と何ら変わるところがないように思われるからである。
『猟師グラフス断片』では、猟師は自分のことに無知な対話相手にこう言っている。「……ひとつはだな、きみはわしについて知っていることをわざと隠して、なにやら底意を抱いている。……で、もうひとつの可能性だが、きみはわしの話をほかの話と混同しているために、ほんとうにわしのことを思いだせないと思いこんでいる。……」
- (13) 『断片』では、猟師は「紀元四世紀ごろ」に猟をしていたとある。
- (14) 例えば、『判決』の友人は寒いロシアの地へ移住した。『流刑地にて』の士官は熱帯の島で旧制度の維持に努める。気候はなるほど正反対であるが、人を寄せつけない、孤独の地という点で、やはり共通性はあるのだ。
- (15) Scholz, Ingeborg: a. a. O., S. 24 f. 参照。ここでは、カフカ文学において、年老いた女のもつ特別な意味と権力機能のことが語られている。『審判』と『弁護人』に登場する、エプロンをした老女がひきあいに出されている。バケツ騎手を破滅させるのは、ひとつには石炭バケツの軽さ、抵抗力のなさ、即ち、彼自身の弱さの感情であるが、もうひとつには、石炭屋のおかみの力である。彼女の落ち着き払ったゆるぎなさは超克不可能なのである。
- (16) Emrich, Wilhelm: Franz Kafka. Frankfurt a. M. (Athenäum) 1970, S. 112 f. エムリヒによれば、『バケツ騎手』にはなおあとに続く部分があったそうである。「この作品は『プラハ新聞』に縮小した形で発表された。もとの手稿にはなおおつぎのような文章が続いている。『ここ(氷山のそばえたつ地方)のほうの下冬の大地よりも暖いのだろうか。あたり一面に白氷がそばえ、私のトロッコだけが唯一の暗色だ。さっきまでは高いところにいたが、いまは深い窪地にいる。山々を見上げると首がはずれそうだ。白く凍りついた氷の平原、それをもう見えなくなったスケーターたちの軌道が幾筋も走っている。私は小

さな北極犬たちの足跡を追っていくが、つもった雪は一インチもへこまない。バケツに乗っている意味はなくなった。私は降りて、バケツを肩にかついで運ぶ。ただ前進あるのみだ。飢えた動物よ、この道は食べることのできる糧へ、呼吸のできる空気へ、たとえ生の向こう側にあるものにもせよ、自由な道へ通じているのだ。偉丈夫の将軍よ、あなたは群衆を導く。雪に埋まった峠道は、あなたをほかにしては何人も見つけだすことはできない。その山道を絶望した人々の先導となれ。だが、あなたにその力を与えるのは誰なのか。あなたに明視を与える者。』カフカがこの作品を『ブラハ新聞』に発表する際、以上のようなあとに続く部分を断念したことは理解できそうな気がする。つまり、ここでは「形象」ではなく、「説明」が前面に出すぎてしまっているためではないだろうか。それによる不統一を嫌ったもののように思われる。だが、この最後までを読んでくれば、バケツ騎手は、おかみによる追放という悲劇的な側面と同時に、「食べることのできる糧」「呼吸のできる空気」「自由な道」への移住という、積極的、肯定的な側面をも知ることができるのだ。

„Der Jäger Gracchus“ und „Der Kübelreiter“

Hidetoshi Yoshino

Viele Gestalten in Kafkas Erzählungen sind auf dem Zwischenbereich zwischen Leben und Tod angesiedelt. Als zwei sehr deutliche Beispiele dafür kann man wohl „Der Jäger Gracchus“ und „Der Gruftwächter“ nennen. Aber auch im „Kübelreiter“, der wegen des märchenhaften Charakters nicht so ernst wie diese zwei Erzählungen erscheint, ist die Hauptperson in derselben schlimmen Situation. Hier versuche ich den „Jäger Gracchus“ und den „Kübelreiter“ zu vergleichen und einige gemeinsame Punkte herauszuziehen. Dabei fasse ich natürlich auch „Der Gruftwächter“ und „Fragment zum Jäger Gracchus“ ins Auge.

„Der Jäger Gracchus“ und „Der Kübelreiter“ sind beide Kurzgeschichten, die nicht einmal sieben Seiten zählen, und in der fast gleichen Zeit, Anfang 1917, entstanden.

(1) Die erzählende Einleitung

Zu Beginn der Geschichte skizziert Kafka das alltägliche Leben in Riva, einem kleinen südlichen Hafen; zwei spielende Knaben auf dem Quaimauer, einen zeitunglesenden Mann auf den Stufen eines Denkmals, ein Mädchen am Brunnen u. s. w. Einige Gestalten, im Type sehr unterschiedlich, werden hier, ohne Verknüpfung aneinandergereiht, und mit einigen Hafenbauten in Beziehung gebracht: Kafka will nicht alles ausführlich schildern, sondern reduziert auf das nur unbedingt Notwendige.

Und der mehrmalige Gebrauch der Zustandsverben (z. B. sitzen, spielen lesen, füllen, liegen……) macht diese Anfangsszene besonders statisch.

In der erzählenden Einleitung des „Kübelreiters“ erwähnt der Ich-Erzähler einige Gegenstände seines Raumes, um die Lage, in der er sich befindet, zu zeigen: Kohle, Kübel, Schaufel, Ofen, Zimmer, Bäume vor dem Fenster und Himmel. Sowohl hier im „Kübelreiter“, als dort im „Gracchus“, kann man die Absicht des Autors finden, Gegenstände der Schilderung und die dazu nötigen Wörter auf ein Minimum zu reduzieren, und dadurch die Lage dieses Ichs möglichst zu vergegenwärtigen.

Hier besteht jeder Satz aus Substantiven und Adjektiven allein; alle Verben sind ausgelassen. Um so stärker übt der folgende, erste vollständige Satz seine Wirkung aus: „Ich muß Kohle haben.“ Das ist seine entscheidende Anfangssituation.

(2) Die Kreuzung der zwei fremden Welten

Da entsteht mit der ‚heranschwebenden‘ Barke des Jägers Bewegung. Die Barke fährt, wie man später versteht, mit dem toten Jäger ewig zwischen den Sphären des Lebens und des Todes umher. Der Einbruch des Fremden in die alltägliche Welt wird vollkommen erreicht durch den Vergleichssatz: „als werde sie (=die Barke) über dem Wasser getragen.“ Die Leute im Hafen zeigen aber für die Ankömmlinge keine Interesse. Durch die dreimaligen Wiederholungen des Wortes „niemand“ zeigt sich schon hier „die totale Beziehungslosigkeit von Jäger und Welt.“: „.....trat *niemand* heran, *niemand* richtete eine Frage an sie, *niemand* sah sie genauer an.“

Der tote Jäger bricht in die alltägliche Welt ein, dagegen scheint das frierende Ich aus der alltäglichen Welt in die Fremde zu entrinnen. Jedenfalls kreuzen sich hier zwei fremde Welten. Wie schon gesehen, mildert der Vergleichssatz den Schock dieser Kreuzung, damit man ihn fast nicht bemerkt. Auch im „Kübelreiter“ mildert sich der Schock durch den merkwürdigen Satz: „.....unten aber steigt mein Kübel auf, prächtig, prächtig; Kamele, niedrig am Boden hingelagert, steigen, sich schüttelnd unter dem Stock des Führers, nicht schöner auf.“ Der Kübel verwandelt sich in ein Reittier. So ist das Fahrzeug, mit dem Ich in die fremde Welt fahren kann, unbemerkt und sehr natürlich vorbereitet.

(3) Die Hilfesuche

„Das Tor oben“ bedeutet für den Jäger eine Erlösung. Aber gleichzeitig ist es auch eine andere Erlösung, sich im Irdischen niederzulassen. Deshalb bittet er den Bürgermeister um eine Unterredung. So beginnen die merkwürdigen Gespräche zwischen dem Toten und dem Lebenden. Obwohl der Bürgermeister „Salvatore“ (der Erlöser) heißt, sind seine Äußerungen immer vorsichtig: „er zieht seine eigene Person möglichst hinter die schützende Fassade seines Amtes zurück“ (Honegger S. 106) Der Jäger scheint seinerseits die Gefährlichkeit seiner eigenen Existenzweise gut einzusehen. Zwar erzählt er über seine Vergangenheit, aber verlangt nichts vom Bürgermeister. Die Gespräche, die mit der bescheidenen Frage: „Glauben Sie, Herr Bürgermeister, daß ich in Riva bleiben soll?“ begonnen haben, enden, auf die Frage seines Gesprächspartners „Und nun gedenken Sie bei uns in Riva zu bleiben?“ und die Antwort „Ich gedenke nicht.“

Weil „ich doch nicht erfrieren darf“, muß Ich auch, wie der Jäger beim Bürgermeister, beim Kohlenhändler Hilfe suchen, „ich darf doch nicht erfrieren; hinter mir der erbarmungslose Ofen, von mir der Himmel ebenso, infolgedessen muß ich scharf zwischendurch reiten und in der Mitte beim Kohlenhändler Hilfe suchen.“

(4) Die topographische Lage

Die topographische Lage, „der Ofen hinter mir“, „der Himmel vor mir“ und „der Kohlenhändler in der Mitte“, gleicht der des „Jäger Gracchus.“

Der Jäger ist „immer auf der großen Treppe, die hinaufführt“ und treibt sich zwischen dem Tor oben und irgendeinem irdischen Gewässer herum. Die Stadt Riva, die für ihn eine Erlösung bedeutet, scheint dazwischen zu liegen, weil der Schlußsatz lautet: „er (=sein Kahn) fährt mit dem Wind, der *in den untersten Regionen des Todes* bläst.“

(5) Die Bemühung um die Erreichung des Zieles

In den beiden Geschichten bildet der Dialog zwischen dem Hilfesuchenden und dem Hilfeersuchten den Hauptteil der Erzählung. Der Kübelreiter versucht alle Mittel und Wege, um Kohle zu bekommen: „er reduziert um der Erreichung seines Zieles willen seine Bitte um Kohle auf ein Minimum sowohl an Quantität als auch an Qualität: „ein wenig Kohle“; „um eine Schaufel voll bitte ich“; „eine Schaufel von der schlechtesten (2 mal)“ (Scholz S. 22)

Dagegen bemüht sich der Jäger scheinbar weniger, sich in Riva niederzulassen. Es hat guten Grund dazu: er treibt sich schon „seit Jahrhunderten“ umher und sieht also seine eigene Lage gut ein. Dennoch gesteht er: „Das weiß ich und schreie also nicht, um Hilfe herbeizurufen, selbst wenn ich in Augenblicken —unbeherrscht wie ich bin, zum Beispiel gerade jetzt— sehr stark daran denke.“ Daraus versteht man, selbst im Jäger ist der heiße Wunsch noch nicht erloscht, sich zu erlösen. Das Gefühl, das er angesichts des scheinbar vor Augen liegenden Zieles hat, ist nichts anderes als das des Kübelreiters.

(6) Die Haltung des Bürgermeisters und der Kohlenhändlerin

Der Bürgermeister empfängt den Jäger höflich, aber er will über die Befugnis seines Amtes nicht hinausgehen, obwohl er seinen Wunsch gut kennt. Er stellt zweimal dieselbe Frage, um sich zu überzeugen, ob der Jäger wirklich tot ist: „Sind Sie tot?“ und „Sie haben keinen Teil an Jenseits?“ Denn „einem Toten scheint er den Aufenthalt nicht erlauben zu können.“ (Kraft S. 184) Er denkt an das Wohl und die Friedlichkeit des Bürgers, weil ihnen der Aufenthalt des Toten Angst und Unordnung bringen kann.

Auch die Kohlenhändlerin sieht sicher zum nahe schwebenden Kübelreiter hinauf und hört seinen Hilferuf; sie weiß auch seinen Wunsch. Der Grund, daß sie seinen Wunsch nicht erfüllt, liegt darin, daß sie auch seinen Ruf: „Ich bezahle sie natürlich voll, aber nicht gleich, nicht gleich.“ gehört hat. Einem Kunden, der kein Geld bei sich hat, scheint sie keine Kohle verkaufen zu können. Das geschieht aus demselben Grunde wie der des Bürgermeisters.

Und ihr Vorwand, ihren guten Mann, der um des Kunden willen die Treppe

hinaufgehen will, zum Halten zu zwingen, lautet: „Erinnere dich an deinen schweren Husten heute nacht. Aber für ein Geschäft und sei es auch nur ein eingebildetes, vergißt du Frau und Kind und opferst deine Lungen.“ Hier nimmt sie „Frau und Kind“ zum Vorwand. Was der Bürger für den Bürgermeister bedeutet, sind Frau und Kind für den Kohlenhändler. Ist es nicht möglich, im Bürgermeister den bösen Willen zu sehen? Es scheint mir, daß er die gute Seite des Kohlenhändlers und die böse dessen Frau gleichzeitig besitzt.

(7) Die Schlußstelle

Der Schlußsatz der beiden Erzählungen ist nicht nur in den Bildern ähnlich, sondern auch in der Auswahl des Wortes gleich. Der eine „steigt in *die Regionen* der Eisgebirge“ und der andere „fährt mit dem Wind, der in den untersten *Regionen* des Todes bläst.“ Die beiden Fahrzeuge, der Kahn und der Kübel, haben dies gemeinsam. „Dieser hat keine Widerstandskraft und ist so leicht, daß er durch eine Frauenschürze weggeblasen wird. Jener „ist ohne Steuer“ und „fährt mit dem Wind.“ Und die beiden kehren ein für allemal nie wieder. Wie der Kahn gegen den Wind nicht fahren kann, so kann der Kübel auch gegen die Frauenschürze nicht fliegen. Denn alte Frauen oder ihre Schürzen in Kafkas Erzählungen (z. B. im „Prozeß“ und in den „Fürsprechern“) haben unüberwindbare Mächtigkeit.